

# 政務調査研究視察 報告書

平成19年 3月 5日提出

視 察 日	平成19年 2月 15日 (木)	
視 察 先	岐阜県大垣市	
視 察 内 容	大垣市民病院について	
視 察 者	鈴木 豊、鈴木 雅登、山崎 憲伸	計 3 名
大 垣 市	<p><b>&lt;大垣市民病院について&gt;</b></p> <p>現在、自治体の経営する病院は増大する医療需要と診療報酬改定による慢性的な医師不足と赤字経営に陥っており、岡崎市民病院においても例外ではありません。</p> <p>そこで黒字経営を長年続けている大垣市民病院を視察いたしました。</p> <p>大垣市民病院は大垣市を中心とした岐阜県西部の西濃圏域医療圏(人口約40万人)の第三次医療まで担っている中核的基幹病院で 888 床を有しております。</p> <p>特筆すべきは長年黒字経営を続けていることで、昭和 63 年、平成 15 年に総務大臣賞を受賞しており、17 年度には約 10 億円の純利益を上げております。</p> <p>その要因はなんとといっても医師の一人当たりの診療収入の多さであり、平成16年度の比較では岡崎市の1日1人当たりの平均収入、269,539 円に比べ大垣市では 424,376 円の収入がありその差は 154,837 円になります。</p> <p>医師一人の平均年収は約 1,250 万円と岡崎市とはほぼ変わらないので、単純にその差額に現在の岡崎市民病院の医師数の82人と診療日数264日をかけてみますと約33億5191万の増収となる計算になり、これだけで赤字を解消でき、さらに15億円以上の黒字を計上できることになります。</p> <p>医師一人当たりの収益の多さは診療報酬に対する弛まぬ研究や、検査を入院時ではなく外来で行うなどの診療報酬単価の引き上げの努力ともう一つ重要な要素に医師が1日に診断する患者数が岡崎市の7.5人に対して大垣市の11.8人という多さにあります。</p> <div data-bbox="1058 555 1378 792" data-label="Image"> </div> <p>▲ 病院の入り口にて</p>	
	<p><b>[感想・岡崎市への反映]</b></p> <p>以上から大垣市民病院の黒字は医師一人一人の頑張りに支えられていることがよくわかります。岡崎市においてもより多くの患者を診断するシステムの再検討が必要であると共に医師に頑張ってもらえる雰囲気作りが大事であると実感しております。</p> <p>医師不足においては大垣市民病院も同様の悩みを抱えておりましたが、優秀な研修医を集め、後期研修の時期に正規職員に採用するというところを行って行っていました。その説明の中で「最近の研修医は勤務がハードな病院を自らのスキルアップのために選ぶ傾向がある。」という山口院長の言葉が印象的でした。</p> <p>また、医師・看護師を集めるのに医師寮などの完備が必要であるとの議論がよく行われますが、この点を質問したところ最近の医師や看護師はプライベートを大事にし、あまり寮に入りたがらず、アパートを好む傾向にあり、実際に大垣市民病院にもりっぱな寮が完備しているが、空き部屋が多くあるとのことで、寮建設は費用対効果が低く、アパート家賃の補助の方がより現実的で経費も抑えられるとのことであり、その点は同意できることである。</p>	